

宮津さんの実践報告に寄せて

長谷川 淳

小学校には「図画工作」という教科が設けられているが、この教科の中の「工作」は、造形を主とし「図画」と結びつけられて、美術教育の教科として位置づけられている、労働教育の教科でも、技術教育の教科でもない。

労働教育や技術教育が子どもの発達にとって不可欠な教育であることは言うまでもない。私立和光小学校ではこのことを重視し、幼・小・中・高校を一貫した技術教育の教科を設けることを試み、進歩的な教師集団に支えられて、森下さんや宮津さんたちが、小学校や中学校で技術教育を試験的に実施し、その結果昭和50年度から「工作・技術科」を正式に設けることになった。この「実践報告」は、和光小学校における「工作・技術科」の先進的な試みの1こまであり、大変貴重な報告である。

この「実践」の個々の場面は、極めてすぐれた実践であり、学ぶべきものが多いが、全学年を通して全体として見ると、この実践を成功させ有意義なものにするためには、いま一歩改善することが必要ではなからうか。宮津さん自身が「道具・材料と加工法の順次性を明らかにする」と述べているにもかかわらず、この「順次性」に疑問を感じる。

資料2「和光小学校、工作・技術科の実践」における各学年の月別の教材一覧表を見て考えさせられることは、使用材料（加工材料）の配分である。材料の性質、加工の難易度などを考慮して、順次性を検討し、その配分方法に工夫を加えるべきではなからうか。例えば、第1学年では紙やボール紙だけの工作で通すとか、次の学年ではベニヤ板の工作で一貫するとか、1つの材料をかなりまとまった期間とりあつかうようにした方がよいのではないか。

何が「順次性」であるかは、材料の加工の難易度だけでなく、加工用具や接合材料との関連もあり、それほど簡単にきめられない問題ではあると思うが、実践者なりの基準をも

ち、それを明らかにしてもよいのではないか。また、材料の中に、紙、木材、竹、金属とならんで「粉」を入れているが、小学校高学年に「家庭科」が設けられているので、他の加工材料と異質な「粉」の処理は、家庭科で扱うべきではなからうか。

道具や刃物の使い方の指導とその順次性についても再検討する必要があるように思われる。ナイフからカンナに至るまで使われているが、カンナを使いこなすことは、かなり高度な技術が必要である。カンナ刃を引っ込めるために、刃をたたいて刃を欠いた例が報告されているが、刃を出すことを教えるなら、引っ込め方も教えなければならない。刃の出し方、引っ込め方まで、生徒自身に試みさせ発見させる必要があるのかどうか。刃物で「手を」いためてはならないし、刃物をいためてはならないことは言うまでもなく、刃物についての基本的な事項は、最初から教えてもよいのではないか。けがをするのをまっけて、けがをしない方法を習得させるのがよいのか、初めからけがの予防を教える方がよいのか、という問題も、十分検討する必要がある。

実践例の中の「水のもれない箱をつくる」ことが、小学校3年生に可能であろうか。マスやオケやタルをつくることは、相当な熟練が必要である。できるだけ正確に、平面や直角に加工する練習にとどめ、水もれを防ぐことは、接着剤、パテ、つめ物を用いる程度にとどめてはどうか。

「製図」が第5学年の後期に課されているが、もう少し早い段階から、フリーハンドの見取り図でもパースペクティブでもよく、製作にかかる前にその構想を描かせるなど、初歩的なことを教えてもよいのではないか。

加工材料、接合材料、道具、加工方法の順次性と系統がどんなものであるか、実験による検証が必要であるが、それを明らかにするためにも、各学年別、月別の配分をもう少し整理し、系統だてる必要があるのではないか。